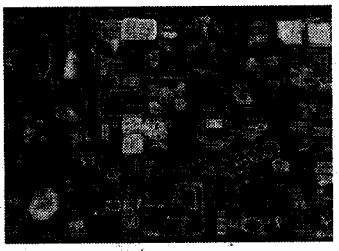
「ごみ」から始めるアクション

総合地球環境学研究所　教授　浅利美鈴

私の所属する研究チームでは、1980年から京都市と協働で、家庭ごみを400種類くらいに分けて分析する家庭ごみ細組成調査を継続してきました。私自身も、学生の頃から考えると、長くごみの研究に携わってきました。ここでは、みなさんにも行動して頂けそうなことをご紹介したいと思います。

心痛む「食品ロス」

世界中のごみを見てきましたが、共通して多い（重い）のが生ごみで、中でも心痛むのが、食べられるのに捨てられてしまった「食品ロス」です。



約90世帯の3日分の家庭ごみ（燃やすごみ）から出てきた手つかずの食品

日本における食品ロスの発生量は、平均すると、1人1日約100グラム、おにぎり1個分くらいと言われています。私たちの研究チームでも、長くこの問題に取り組んできました。難しいのは、食品ロスの生まれる背景は様々で、複雑な原因がある点です。つまり「これさえできれば解決する！」という水戸黄門の印籠のような決め手がある訳でなく、あの手この手で、対策を考えなければならないのです。そこで、実態調査やアンケート調査の結果などに基づき、できることを洗い出してみたチェックリストがこちらです。みなさんは、どのくらい、意識／実践されている項目がありますか？全ては難しいと思いますので、一つでも多く、実践アイテムを増やしてみて頂ければと思います。

食品ロスも資源に

食品ロスは、出ないに越したことはありませんが、体調が悪くて食べきれなかったり、アレルギーがあって残さざるを得なかったりすることもあります。そんなときは、資源として活用する方法も考えられます。例えば、庭に穴を掘って埋めて土に還したり、堆肥にしたりすることも可能です。堆肥化には、エコな手回し式のものや、段ボールを使って手作りでできる方法もあります。

なお、私たちのチームでは、京都市右京区京北に、生ごみのバイオガス化施設を設置し、液肥やガスにして、農業利用する方策を試しています。焼却炉で燃やすにはもったいない資源だと考えています。

クリーンアップも、健康管理につなげる「ごみゼロ」アプリ

他にも、紹介したい「ごみ」話は色々ありますが、すぐに始められて、世界とつながることのできる行動として、清掃活動を取り上げたいと思います。

プラスチック汚染問題が注目を集めていることは、皆さんも見聞きされているのではないでしょうか。解決に向けて、国際的な議論が進められ、例えば「大阪ブルーオーシャンビジョン」においては、2040年までに、新たに海洋投棄されるごみをゼロにすることが謳われています。この達成は容易ではありませんが、清掃活動やポイ捨て防止策、そのための支援や教育等が進められています。日本においては、公害問題やポイ捨てに対して、各種対策や取組が功を奏し、一定の改善を見てきた経緯・経験があります。1970年代には、プラスチック等のごみで埋め尽くされていた川や海も多数存在していましたが、地道な美化運動や清掃活動により、美しい環境を取り戻したところも少なくありません。他方、特に途上国においては、経済成長や人口増加に伴い、ごみの散乱やポイ捨て等が増加し、生活・自然環境の悪化が著しい状況です。また、そのような国・地域に比べると少なくなったとは言え、日本国内においても、河川や海岸の汚染問題は、様々な影響をもたらしており、海外からの漂着ごみに苦しむ地域もあります。

そこで私たちは、日本の環境問題克服の経験の一つとして、また、個々人の環境意識・行動のトリガーとしての清掃活動に着目し、それらを継続・展開するための支援ツール（ごみゼロアプリ）を開発しました。なお、この活動は「ごみゼロ共創ネットワーク」として、2025大阪・関西万博（EXPO2025）に向けたEXPO共創パートナー事業にも位置づけられており、数ある中からベストプラクティスとも選定されています。このアプリを使うと、ごみの種類や点数等を記録できるだけでなく、歩いた軌跡や歩数もカウントされますので、日々の健康管理にもつなげて頂けます。

万博を機に清掃活動を世界へ！ごみゼロアプリ

清掃活動団体の中には、高齢化や負担増加等により継続に困難を感じているところも少なくないと思います。本アプリでは運営団体をサポートする機能を搭載しており、活動日の事前案内や参加者人数把握も可能です。

「ごみ」から始めるアクション

今回は、食品ロスと、清掃活動を取り上げましたが、他にも、知られざるごみの世界は多様に広がっています。この機会に、少しでも関心を持ち、できることから始めて頂けますと幸いです。